

埋め立て架橋計画と軀の浦

長谷川 博 史

はじめに

軀において魅力的なものの一つが、伝説である。伝説それ自体もさることながら、それらが変化していく過程も興味深い。口承伝説が一般的で、文字に記録された情報はごく一部の断片的なものにすぎない中であって、軀には比較的多くの文字化された伝説が残されている。そのため、各時代によって伝説の内容が異なっていることがわかるとともに、時代によって異なる諸種の批評・選択・整理・総括を知ることができ、場合がある。そのような、伝説自体の変容や、伝説のとりえ方の変容には、それぞれの時代背景が映し出されている可能性があるのであるかと思われる。

伝説は史実とは異なるし、根拠不明なものや荒唐無稽なものが含まれるのと言うまでもないが、伝説を語り伝える営みには、その場所に意味づけを与え、その場所であるがゆえに

語られる意味をなすものが数多く盛り込まれている。ところが、現在の軀を訪ねて、伝えられた伝説を想い起こしても、その場所に溶かし込ませて読み解くことが必ずしも容易ではない。もちろん見る人が見たらわかるという話しだと言われればそれまでのことであるが、福山市から県道を通って福禅寺の南側に至る最も一般的な経路から見ると、町の全体的な構成や、この町の持つ固有の魅力が、わかりやすいとは言えないであろう。それらは、時間をかけて歩き回る中で、ようやく少しずつ像を結んでくる。こうしたことは何も軀だけの問題なのではなくて、むしろ全国の至る所に、はるかにわかりにくい場所がいくらかでもあるというのが現状であると思う。

本稿では、軀においてなぜ埋め立て架橋計画が持ち上がり、一九八三年以来の四半世紀にも及ぶ混乱と対立を招いてしまったのかという問題について、この計画の是非を問うのではなく、軀の持つ魅力がなぜ一見わかりにくくなってしまったのかという観点から考えてみたい。

一 輓の伝説と『沼隈郡誌』

(一) 地名起源

江戸時代の地誌を見ると、輓の地名起源に関する実に様々な伝説が種々の論評を加えられながら列挙されている。それに対して、近代以降の書物に見られる地名起源の説明は、非常に簡潔であり、根拠薄弱なものや荒唐無稽な意味づけなどを的確に見分けようとする姿勢が強められている。

全国を対象とする書物の性格によるが、たとえば野崎左文『日本名勝地誌』(一八九五年)は「此地は舊名渡守と云ふ神功皇后三韓を征伐し給ひし時糸崎より此地に渡りて輓を治め給ひしとあり輓津の名是より起る」とのみ記す。ただし、その叙述の内容は、何に基づくものであるかを推測しにくいもので、考証の結果とは言えないと思われる。吉田東伍『大日本地名辞書』(一九〇七年)に「其港形巴字形を成すを以て或は巴津はしんと称す、巴輓邦訓同し」と記されているのは、明確には地名起源の説明を意図したのではなく、「巴」の語源から見て誤解を含むと考えられるが、輓の地名に関わる記述はこれのみである。いずれも、諸種の「伝説」に触れるようなことはしていない。

ところで、大正昭和初期の輓は、次第に列島の幹線経路からはずれていった明治期の苦難を乗り越え、再び往時の繁栄を取り戻すために、歴史ある景勝地として活路を見出そう

とした時期であったと考えられる。一九二五年(大正十四)の名勝指定や、一九三四年(昭和九)の国立公園指定は、大きな希望と期待を抱かせるものであった。それらの重要な基盤には、濱本鶴實に代表される郷土史研究の蓄積があったと考えられる。その成果の代表的なものが、先憂会編『沼隈郡誌』(一九二三年)であり、現在でも当該地域史研究の基本文献である。

その『沼隈郡誌』では、輓の地名起源を次のように説明している。

①神功皇后凱旋の時、戦場にて手に巻き玉ひし稜威の高輓を神璽として渡守の神に報賽し玉ひしより地名となる、一説に『②渡の札場より要害の端を見渡せば中高くして其末拳の如し、實に輓の形に見ゆ、又③平の明神より要害まで海邊弓の如く、地形自然と射具に似たり、往古より輓と名づく云々』とあれど地形の類似は偶然と見做すべし。(①③及び傍線は筆者)

神功皇后が凱旋時に弓具「輓」を渡守社へ納めたという①の主旨は、十八世紀中頃成立の「輓浦志」^③にみられる「風土記云、神功皇后、征伐三韓、而後、以輓、納沼隈郡渡之地、故名此地、曰輓」という記述や、「輓浦志」の年代不詳後筆朱書の「皇后御凱陣ノトキ、再此浦ニ御船ヲ寄セ給ヒ、御手ニ纏ハセ玉フ高輓ヲ御納メアリテ、御報賽之御自祭シ給ヒシ

ヨリ、此浦ヲ鞆ト浦人等唱ヘシ由」という記述をもとにして
 いると考えられる。①の基本的な構図は、「鞆浦志」より古
 い文献には見られないものである。また、②③の説も、「鞆
 浦志」で紹介されたものが最も古いと考えられる。

ただし、弓具「鞆」が神霊として渡されたとするのは、
 一六八五年(貞享二)の渡守大明神棟札銘(「鞆浦志」収載)に、
 「古記曰、昔神功皇后、三韓征討之日、於此浦、備舟楫、畜兵糧、
 而發船、因茲、於和多須之地、以弓鞆、為神靈、而祀舟玉神、
 故名此地、曰鞆」とあるのが最も古いと思われる。また、「稜
 威の高鞆」という表記は、一六八三年(天和三)成立と言わ
 れる「あくた川のまき」が「鞆」という文字の由来について
 類例を記した中で「日本書紀 卷一」の天照大神の武装の様
 子を示した一節を引用したのが、今のところ鞆における記述
 の初見である。江戸時代の地誌に、神功皇后が渡守社に「稜
 威の高鞆」を納めたと表記したものがあつたわけではない。

『沼隈郡誌』において、郡の通史を概観した第二章「沿革」
 には、「神功皇后と鞆」と題する項目がある。そこには、「仲
 哀天皇神功皇后と共に熊襲征伐の爲め筑紫に幸せらる、や、
 翌三月皇后に命じ越前角鹿の筒飯大神に戦捷を禱らしめ玉
 ふ、皇后命を果し再び筑紫に航せらる、時、鞆の浦にて海神
 を祀り渡海の平安を祈られ、三韓を征して凱旋し給ふに當り、
 武器鞆を納めて報賽し、爾來三韓來貢の碇泊地として聘使招
 待の官吏及び舞姫を置かる、に至り、水驛として榮え、沼隈
 文化の揺籃地となれり。」と記されており、神功皇后伝説を「史

実」と位置づけたことを確認できる。

このように、①は、伝承の紹介ではなく、地名起源伝承の
 中から最も信憑性が高いと判断した事象や表現を組み合わせ
 て短文にまとめたものであり、②③の自然地形説批判をあえ
 て追記していることから、鞆地名起源の結論が書かれてい
 ると言える。これは、様々に語られてきた伝説を否定し、「考
 証」をふまえた「史実」としての地名起源を説明しようとし
 ている点に大きな特徴があると考えられる。たしかに、②は
 現在の地形を見る限り説得力が非常に乏しく、③も何故特定
 の弓具の名称が選ばれたのか説明されていないので、これに
 関する限り『沼隈郡誌』の記述には理がある。「鞆記」や「あ
 くた川のまき」など、「鞆浦志」よりも古い地誌類が紹介した、
 船の「とも(艘)」を着岸させたことにちなんで神功皇后が
 命名したとする説に触れていないことも、『福山志料』(一八
 ○九年)に記された批判をふまえた「考証」の結果であると
 考えられる。

これ以後、戦前の諸書には、同じような叙述が繰り返され
 ていく。『沼隈郡誌』刊行の翌年に、同じ先憂会が発行した『備
 後名所鞆津と阿伏兔』(一九二四年)に同様な記述がなされ
 るのは言うまでもないが、たとえば鉄道省「景観を尋ねて」
 (一九三三年)では、「神功皇后征韓の帰途御手に帯び給ふ鞆
 を召名前神に納めて報賽せられたことによりこの名を得た」
 (八五頁)と記され、澤田久雄編『日本地名大辞典』(一九三八年)
 には「昔は鞆の津と称し、神功皇后征韓の帰途、手に巻き給

ひたる武器なる軻を沼名前前の神に納められしより此名を得、「一説には前面の港湾巴状をなすを以て巴津と云ひ後に軻津と書くに至りしものともいふ」と記している。後者の後半部分は吉田東伍の影響と思われるが、軻の地名起源説はおおむね一つに絞り込まれている様子をうかがうことができる。もちろんそれらの背景には軍国主義時代の特異な歴史観があるが、『沼隈郡誌』は、①の地名起源説がオーソライズされていく重要な役割を果たしたと考えられる。

軻と神功皇后が結びつけられるのは、九州・瀬戸内海地域を中心に広く派生していった神功皇后伝説の一流であつて、なおかつ『日本書紀』に記された子息応神天皇の命名伝説からの連想が、早くから存在したからではないかと思われる。したがつて、地名が先に存在したと考えるのが妥当であろうが、それゆえに、語り伝えられた伝説が豊かなバリエーションを持っていると考えられる。

軻の史料上の初見である『万葉集』では、すでに「軻」の字が浦地名として宛てられている。淀姫神社・軻城跡・福禪寺・大可島と続く丘陵と島によって作り出される景観は、海岸線の移動や時期による変形を経たとしても、これらに囲まれた南側に円弧形の海岸線を形成する恰好の条件をなしている。海進期にあたりと言われている平安時代には、軻城跡の西側に海が入り込み、それが江之浦の地名を生んだ可能性もあるが、それ以前や以後においては、後山から見下ろした姿が弓具「軻」のような形をなしていた時期が長く存在したと

推測される。諸種の軻地名起源伝説は、弓具「軻」を実見できなくなった時代に生み出されたものであると思われ、それは『沼隈郡誌』に紹介された自然地形起源説(②③)も同様である。現在において『沼隈郡誌』の軻地名起源説①自体に説得力がないことは言うまでもないが、江戸時代の地誌類とは全く異質な、特定の地名起源を史実として確定する考え方が定着していく時代であつたことが、重要ではないかと思われる。

(二) ささやき橋

もう一つ例を挙げると、『沼隈郡誌』では、名蹟として「密語橋(ささやき橋)」にまつわる伝説を記しているが、これも江戸時代の地誌類と比べてみると興味深い。

現在の「さ、やき橋」は、静観寺門前の道を横切る溝に架けられた短い石組の橋である。「あくた川のまき」によれば、当時(一六八三年頃)すでに「さ、やき橋」が「軻の名所」と認識され、「あしふみふたつしつらんほとして、ちいさき石橋也」と述べているので、現在と同じようなものであったことが確認できる。「あくた川のまき」の著者(『西備名区』によれば軻の法華宗僧侶)は、橋の来歴について、昔は入江にかかる非常に長い橋であつたが、やがて「ささやきの音」もしなくなり、朽ち絶えていったので、寛永年間の末(一六四〇年頃)に橋の古材を掘り出してやや南側に架け替えたところ、これも年々草ばかり繁茂して汚れていったため、昔のこ

とを後世に伝えたいと石で橋を架けなおしたものである、と記している。「ささやき」とは、かつての橋が発する音に起因する名称である、と考えられていたことを窺わせている。その「あくた川のまき」には、次のような伝説が、考証を交えながら紹介されている。

むかし鞆源左衛門といひし人売ありけり。ゆきかふ者をかとはかし、此橋のふもとに出あひつゝ、みそか言して人をうりければ、扱なん、さ、やきの橋といひけるとなり。

ただし、「あくた川のまき」の著者は、鞆源左衛門は鞆の領主であつて人売りではないだろうと述べて、この伝説を批判するとともに、続けて次のような話を記している。

あるひとの物語に、鞆源左衛門にはあらず、中嶋源左衛門とて、古城山の乾の方に住ける人なり。其比なにかしの中將とやらんの子を売けることのあらわれて、終に刑罰にあひぬ。其靈折々浦人をなやましければ、おそれおのゝきて源左衛門といふ名をさへ、つかざりけるを、今の鞆源左衛門の名は處にふさはしからすと、人のいひけるをも、流石武士魂にて、なてうことかあらんと、うけひかすして、はては此こと（承久の乱において鞆源左衛門正友が関東勢に生捕りにされ、子息源太正氏が身代わりとなつて処刑されたという「古記」に記された話を指

す）にあひぬ。さりければ、いよく浦人おちおそれて、今に至るまで、鞆の浦に此名をつく人なしとなん。

『備陽六郡志後得輯』によれば、これにさらなる後日談が加わり、水野氏時代（一六一九〜一六九八年）に、どうしてそんなことを信じる必要があるかと言つて、「源左衛門」という名前を名乗つた者があつたが、やはり刑罰を受けたため、鞆では以後この名を付ける者はいない、という話が記されている。『沼隈郡誌』では、同じ話の年代を元和年間（二六一五〜一六二四）の頃のこととしている。

「あくた川のまき」に紹介された複数の伝説は、伝説に次々と尾鰭が付されていつた過程を窺わせるものであり、それらは後の地誌類にも様々な影響を与えている。いずれも人売りや怨霊に鞆の人々が恐れおののくという、怪しげで恐ろしい話しとなつている。肝心なことは、「ささやき橋」伝説の舞台が、後山の麓の寺院が集中する地区にあることである。ここは、鞆において古くから寺院の多くが後山山裾に建立され、多数の墓所も集中していることは、鞆城跡の東側と南側の町筋を基軸に形成・発展を遂げてきた鞆全体の構造にも関わっている。怪しげで恐ろしい「ささやき橋」伝説は、町全体の構造が、住む人にも訪れる人にも理解できるような構図を自ずから備えており、町の姿が伝説の中に反映されていると言えるかもしれない。

ところが、『沼隈郡誌』には、これらのほかに、やや趣の

異なる伝説が紹介されている。

橋の袂に遊女など棲み、往交う人の袖を捉へて密語きけるとなり、或は傳ふ、応神天皇十六年百濟より博士王仁經典を捧げて至る時に鞆の駅館に官妓江浦といふ美姫ありしが、接待の公吏武内臣和多利と相思の仲となり、夜な夜な橋上に喃々の語を交へ、或は橋畔にきぬくの別を惜みしが、好事魔多く二人は終に曠職の罪に問はるゝに至れり、因て密語の橋といふなりと。

後者の悲恋伝説が「応神天皇十六年」の王仁博士渡來の時とするのは、『日本書紀』の叙述を参考にしたものであり、地名起源伝説とも接続しやすい構成をなしている。これらの伝説は、なぜ江戸時代の地誌類に採録されていないのだろうか。その理由としては、江戸時代の諸書の著者が偶然耳にしていなかったか、あるいは意図的に採録を避けたか、もしくは十九世紀以降に新たに生み出された伝説であるか、等々を想定することができる。

一三〇二年（乾元元）に鞆の浦を訪れた後深草院二条が、「たいかしま（大可島）」で心静かに暮らす遊女たちの姿を描いたように（『とはすがたり』）、かつての鞆の浦における遊女たちの拠点は大可島にあった。大可島はやがて陸繋島から陸続きとなつて、江戸時代には道越町（満越町）を形成したが、江戸時代の遊女町である有磯町は道越町の内部に位置した。

鎌倉時代後期から江戸時代に至るまで、遊女の活動拠点は港町の南東側に位置したことがわかる。これとは全く異なる町の北西側の寺院門前に位置した「ささやき橋」について、遊女が橋のもとに棲んでいた話や、芸妓にまつわる悲恋物語を生み出したり、伝えていこうとしたりする感覚は、「ささやき」という言葉からの連想である点と同じであつても、町の姿をふまえた感覚とはどこか異質である。このような、町の構造と伝説の舞台の微かなズレは、町本来の姿が次第に見えにくくなつていく過程を物語っている可能性を否定できないように思われる。それは、港湾拠点としての重要度が後退し、港の持つ意味が変化した時期の町の姿を反映している可能性がある。

伝説が変化していくのは、当たり前なことではあるが、町の姿からやや隔たりのある話が注目されていることは、地名起源とはまた別の意味において、江戸時代と大きく趣が異なつていように思われる。

二 鞆の浦埋め立て架橋計画とその背景

鞆の浦埋め立て架橋計画は、近代以降における鞆の変容と無関係ではないと考えられる。

埋め立て架橋計画とは、一九八三年（昭和五十八）十月、国・広島県・福山市を事業主体とし、鞆港に橋を架けて一部を埋め立てる県の計画案が、福山港地方港湾審議会の答申によつ

て承認され、「軻地区道路港湾整備計画」が策定されたことに端を発している。この時の計画は、軻の浦漁業協同組合との交渉が難航し埋立協議が整わなかったため、一九八七年に翌年度予算化が見送られ、事業中止となった。

その後、一九八九年（平成元）に開催された「海と島の博覧会」の共催会場として、市が県に対して軻港の環境整備を求めたことをきっかけとして、計画の見直しが始められた。そして、一九九一年に再度計画案が策定され、一九九三年には埋立規模を四・六畝から二・三畝に縮小する新計画案が提示された。一九九八年に、広島県教育委員会が埋立部分の一部について近世港湾施設「焚場」（＝船の修理場）である可能性が高いとの結論を公表したため、一九九九年には埋立面積をさらに縮小して二畝とする計画案が提示され、二〇〇〇年の福山港地方港湾審議会において承認された。しかしながら、公有水面埋立免許申請に必要な地元排水権利者の同意を得ることができなかつたとして、次の段階に進むことができないまま、二〇〇三年九月に計画は凍結されるに至った。

しかし、二〇〇四年に就任した現福山市長は、排水権利者の100%同意がなくても埋立免許は可能であるとして凍結解除を表明した。とりわけ二〇〇七年からは一挙に計画実施に向けた動きが活発化し、五月に埋立免許が出願され、二〇〇八年六月に広島県が国土交通省に埋立認可を申請した。この間、二〇〇七年四月に、地元住民等163名を原告として埋立免許差止めを求める行政訴訟「軻の浦の世界遺産登録を実現する

生活・歴史・景観保全訴訟」が起こされ、二〇〇九年二月に結審、判決を待っている状況（同六月現在）であるが、県と市はその結果に関わらず認可がおり次第すみやかに着工したいとしている。

それにしても、一つの公共事業で、未着工のままこれだけ長期にわたる紆余曲折を経てきたこと自体が特徴的である。それは、地元において多数派を構成しているといわれる推進派住民からの根強い計画推進への熱望があり、それが行政によって計画が推進される重要で決定的な背景をなしていること、しかしながら、ICOMOSをはじめとする各分野専門家や外来の訪問者などが、地元の反対派住民とともに、これまたねばり強く反対の意思を繰り返し表明し続けてきたということ、によっている。

なぜこのような経緯を辿らなければならなかったのか。計画の是非ではなく、むしろそのこと自体が、今後は検証の対象にされていくのではないかと考えられるが、そこには根の深い様々な要因があると思われる。

たしかに、軻の浦埋め立て架橋計画は、一九八三年に策定されたことに始まるが、実際には、港湾計画の策定作業に着手した一九八一年以前から、既定の計画という側面を併せ持っていた。沼隈半島を一周する県道の整備は戦後に構想が具体化され、一九五〇年（昭和二十五）には都市計画道路の線引きが行われた。このうち、県道福山軻線の整備が進められて、いわゆる軻海岸線の供用が開始されたのは一九六六年

である。また、鞆港の西側に至る県道鞆永線後地工区は一九七二年に着手され、供用開始は一九八六年のことである。一九九一年に計画が見直されてから以降について言うならば、鞆港を挟んで相互に望みできる二つの二車線県道を結びさえすれば、県道整備が完了する状況にあり、一九八三年段階にさかのぼるならば、福禅寺の東側から南側に出現した現代の二車線道路の存在を大前提として、鞆の浦埋め立て架橋計画が発したと言える。

埋め立て架橋計画は、できてしまっている道路を前提に、それらを最短ルートで結び、港町の周囲を道路で取り囲むことよって、半世紀を越える県道整備事業を完了させようとするものである。陸の孤島と化していった近代以降の閉塞感を払拭する起爆剤として、この事業に期待を抱く地元気持ち自体は、よく理解できることである。この問題は、一九八三年よりも時間をさかのぼって検証することが必要であると考えられる。

この計画の是非をめぐる論点は多岐にわたるが、景観論はその中でも中心的な位置を占めてきた。ただし、「景観」という言葉には、ややもすれば切り取られた画像のようなイメージがつきまとい、特定のいくつかの風景に基づく視覚認識が古くから実在する鞆においてはとりわけその傾向が強いように思われる。しかし、本当に残し伝えるべきものは、「形」ではなく、そこに映し出される物の見方や考え方である。たとえば旅行案内記に「価値が高い」「美しい」「長い歴史を経

ている」と書いてある名所・旧跡を、ピンポイントで見物するという古くからの手法だけでは、これから先の観光開発すらも成功するとは考えがたい。全体の姿を、地域や国の財産として位置づける認識がなかなか定着してこなかったことは、現在を生きる世代が抱えている社会認識・文化意識の問題点を浮き彫りにしている。日常生活から切り離せなかったはずの多種多様な「文化財」の意味が、わかりにくい社会になっているからであると考えられる。

地域固有の歴史的環境や文化的価値について、評価が定まっている「切り取られた風景」以外の風景・風情・景観・環境や、専門家による診断を経た文化財以外の様々な遺跡・風習・伝説・伝統の意味が、見落とされたり時に軽視されたりする意識が存在するとするならば、それは、時代状況も具体的な中身も全く異なるとは言え、地名起源を一つの結論に集約し権威付けていった『沼隈郡誌』の時代の考え方にも通底している。計画の妥当性を、重要文化財の数によって判断したり、埋め立て架橋をしても町並みや歴史的港湾施設は壊れないという発想が生み出され、受け入れられていく現状は、それを反映していると思われる。

海と町との接点を遮断して町を取り巻く海辺の大きな道路から、内陸側の裏路次へと入る導線は、歴史的に積み重ねられてきた鞆固有の姿とは、根本的に相容れない異質な空間構成であると考えられる。それを完成させることが地域発展の条件であると主張してしまう意識構造は、決して福山市や地

元計画推進派に特殊固有なものではなく、遅くとも高度経済成長期以降の社会全体に普遍的な現象であると思われる。その淵源は、さらに時代を遡った時期に起因している可能性がある。いま問題なのは、そのことであると考えられる。

おわりに

鞆の特質を体現しているのは、自然地形・自然景観のみではなく、それを基盤に形成され、受け継がれてきた、歴史的な環境・景観であると思われる。町の導線や、それと港との濃密な接点、それらが生み出す人・物の流れが住民・外来者にこの場所独特の空間構成を自ずから感得させうるような環境を、今なお残していると感じられる。言ってみれば、「怪しげな」伝説をも生み出し伝えたような、様々な想像力と創造力を育む「豊かさ」が、なお残されていると感じられる。そのような空間全体が、歴史的景観なのだと考えられる。したがって、「景観」とは単なる「形」ではなく、部分的に切り取られた「美しい風景」だけでもないと考えられる。時代に異なる美的感覚や、それにもとづく多分に政治的な情景も、もちろん鞆の歴史の重要な一側面であるが、それらは歴史的景観の一部を構成するにすぎない。

鞆城跡・福禪寺の丘陵間の峠に「渡之地」があり、そこに産土神であり海洋神・道触神とされる渡守社が形成され、地名起源にも結びつけられていったことは、この町が、これら

の丘陵の両側の麓にできた港湾機能を結び付け、港と一体となって生きてきたことをうかがわせている。鞆は、これに後山山麓の寺社密集地域、祇園社から海に至る東西の参道沿い、金宝寺（安国寺）周辺など、別の町並みが加わってできた複合的な構造の町である。後山山麓に寺社が集中していくのは、基本的には福島氏による鞆城下町の建設にともなうものであるが、すでに中世においても、かなりの寺社が後山山麓に存在した。ある特定の時期の細かい復元が必要なのではなく、そのような町の基本的全体的な構成や形成過程がわかるような残し方こそが、歴史的景観の保存ということではないだろうか。

鞆の特質は、長期にわたって機能してきた重要港湾でありながら、自然環境を人間が改変していった側面よりも、全体の大きな枠組み、大きな景観を、残し伝える営みが受け継がれてきた側面がよくわかる点にある。たとえば、尾道のように中世以来の埋め立ての累積によって発展した港町とは異なり、朝鮮通信使随員が「櫛の齒のようだ」と記した狭い地割を厭わず、埋め立てへの依存度があまり高くない。それは地形的・技術的な問題にもよっていると推測されるが、結果として、通常であれば改変の激しい港町の宿命を逃れ、東西の海流が出合う船の滞留しやすい海域に位置する自然条件にも恵まれたが故に、古い港町の姿を彷彿とさせる独特の環境・景観が伝えられたのではないかと思われる。鞆に古い景観が残されたのは、近代以降の開発に乗り遅れたことだけが原因

ではないと考えられる。

冒頭に触れた軛の「わかりにくさ」とは、伝説自体に意味があるということではなく、伝説を生み出したたり伝えていく営みの背景をうかがい知ることができるとどうかを、問題にしているのである。その「わかりにくさ」とは、多くは近代以降の歴史の所産であって、一概に非難すれば済むものではないと考えられる。しかも、独自の空間構成がほぼ壊されてしまった他の多くの港町は、軛よりもはるかに深刻な状況にある。現状において、軛は古い建物・港湾施設をはじめとする文化財の宝庫である。近年の地元における町づくりの取り組みや、軛の浦歴史民俗資料館をはじめとする地道な活動の蓄積は、軛の魅力をわかりやすく伝え最大限に活かす方法の具体化に、大きな役割を果たしている。しかし、軛へ人々を導き、町を構成する、幾筋もの海陸の導線が、さらに大きく形を変えてしまえば、それまで地域観を育む重要な手がかりであった空間全体は、線や点に断ち切られたり、全く別物になつてしまう可能性が高い。個々の地域文化財の意味を感じ取ることができるような全体のイメージが、格段にそして致命的にとらえがなくなってしまう。

港町の外側に大きな車道を廻らせるという発想が生み出され長く受容されてきたことの意味を、単に軛の問題としてではなく、また単に非難するのではなく、現在を生きる世代の者として今一度問い直してみる必要があると思われる。

〔註〕

- (1) 野崎左文『日本名勝地誌 第六編 山陽道之部』(一八九五年)の「軛町」の項。
- (2) 吉田東伍『大日本地名辞書』上巻(一九〇七年)の「軛」の項。
- (3) 『備後叢書(二)』(一九七〇年)所収。
- (4) いずれも『備後叢書(二)』(一九七〇年)所収。
- (5) 鉄道省「景観を尋ねて」(一九三三年)八五頁。
- (6) 澤田久雄編集発行『日本地名大辞典』第五巻(一九三八年)の「トモ 軛・登望」の項。
- (7) 『備後叢書(二)』(一九七〇年)所収。
- (8) 片岡智「景観美の文法―名勝軛の浦・一七―二〇世紀―」(『歴史科学』194、二〇〇八年)。
- (9) 慶七松『海槎録』。
- (10) たとえば、近代における風景(広く人々に認知され共有された風景)の転換を論じた西田正憲『瀬戸内海の発見』(一九九九年)では、絶対的価値にとらわれていた江戸時代までの伝統的・歌枕名所的風景が、近代の合理的・写實的・自然主義的風景によって相対化され克服されていったととらえる。ただし、西田氏は、相対化されたまなざしが空間の均質化をもたらして環境破壊につながったとも論じており、近代に生み出されたものの中に今日的課題の淵源を辿る点においては、本稿と共通しているのかもしれない。